

4.

特別招聘教授 プロジェクト

2015 年度特別招聘教授
プロジェクト概要

マリー・ピコーネ特別招聘教授

アン・ウォルソール特別招聘教授

2015 年度 特別招聘教授プロジェクト概要

世界レベルの研究者が国際的・学際的な知見をダイレクトに提供

ジェンダー研究所の重要な事業の一つとして「特別招聘教授プロジェクト」がある。このプロジェクトの主な目的は、グローバルな視野から本学の教育研究活動の一層の推進及び活性化を図ることである。具体的には、海外の著名な研究者を招聘し、高水準の研究プロジェクトの実施、国際シンポジウムの企画・登壇を含む国際的な研究ネットワークの構築、大学院生を対象としたセミナー等での講義による国際レベルのジェンダー研究教育プログラムの実施をしていただいた。

2015 年度は、マリー・ピコーネ氏（仏・社会科学高等研究院准教授）とアン・ウォルソール氏（カリフォルニア大学アーバイン校名誉教授）の 2 名を招聘した。

ピコーネ氏は人類学と宗教学が専門であり、ジェンダー視点を重視しながら日本の宗教・民間医療・生物医学の相互作用過程に関する研究成果を発信し続けてきた世界的に高い評価を得ている研究者である。本学採用期間中（2015 年 10 月 1 日～11 月 30 日）には、1980～90 年代と現在の水子供養の比較および、現代における閻魔堂の地獄表象の研究プロジェクトの一環として、東京および近畿地方の寺社へのフィールドワークを実施した。また、新しく、献体慰霊についての調査も開始し、篤志献体に関する普及啓発に関わる事業運営の中核を成す医師等へのインタビュー調査ならびに篤志献体事業を運営する公益財団等に関する資料調査を行った。

ピコーネ氏には 2015 年 11 月 14 日開催の、お茶の水女子大学設立 140 周年記念国際シンポジウム「はたして日本研究にとってジェンダー概念は有効なのか？：人類学の視座から改めて問う」において「Gendered Attitudes towards Fetal Death and Abortion: Recent Changes in Practices and Imposed Attitudes in Europe versus *Mizuko Kuyo* in Japan（胎児の死と中絶をめぐるジェンダー化の諸相：ヨーロッパの実践的変容と日本の水子供養の対比的考察から）」の研究発表を行っていただいた。

また、2015 年 11 月 27 日には「Interviews and Questionnaires on ‘Sensitive’ Subjects: Problems in the Investigation of Sexuality or of Suicide（センシティブなテーマにかかわる面接調査と質問紙調査：セクシュアリティあるいは自死の研究実践をめぐる諸問題から）」と題する大学院生対象のジェンダー研究所セミナーを実施し、ピコーネ氏自身の研究テーマにおける課題を実例に挙げて、調査実践に関する講義を行った。

ウォルソール氏の専門は近世日本の社会史である。日本の近世末期から明治・近代国家成立における社会的変動とそこに生きる歴史主体との関係を、ジェンダー秩序・編成の視点を組み込んだ、新たな歴史研究の視座を提示することにより、世界的に評価されている研究者である。とくに、明治期の女性史、大衆的記憶、農村起業家と家族イデオロギーなどの研究が著名である。本学採用期間中（2015 年 11 月 4 日～2016 年 1 月 19 日）の研究プロジェクトは「Faith, Politics, and Affection: A Social History of the Hirata

Atsutane Family (信仰、政治、愛情：平田篤胤一家の社会史)」であり、平田神社から国立歴史民族博物館に寄贈された大量の文献を基に、日本のナショナル・アイデンティティ言説への貢献で知られる平田篤胤一家の個人的な関心事や家族の変遷、政治とのかかわりなどについて、代々木の平田神社で毎月開催されている「平田国学研究会」へ出席し、多くの一次資料を読み翻訳した。また、東京中央図書館で戊辰戦争の際の槍術戦に関する資料を調査した。

ウォルソール氏は 2016 年 1 月 18 日に開催された国際シンポジウム「科学と工学を目指す女性へ (Women in Science and Engineering)」を企画し、進行役も務めた。この国際シンポジウムではカリフォルニア大学アーバイン校のキャロル・セロン教授を招聘し、パネリストとして、本学の鷹野景子理学部化学科教授、加藤美砂子理学部生物学科教授が登壇した。また、2015 年 12 月 6 日には、ジェンダー研究所セミナーおよび 2016 年 1 月 12 日には比較歴史学コースゼミにおいて「いい兄貴-わるい弟：Gender Dynamics in an Early Modern Family」と題して研究プロジェクト成果を基に、武家家族内の男性間格差についての講義を行った。

両氏とも、熱心に職務をこなし、シンポジウムやセミナーでは、進行中のプロジェクトからの成果を発表してくれるなど、最先端の知見を本学の教育現場で披露してくれた。また、ウォルソール氏は、シンポジウム企画にあたり、本学でも力を入れている理系女子をテーマに取り上げて、本学のジェンダー教育に多大な貢献をした。

両氏と国際シンポジウムおよびジェンダー研究所セミナー参加者との間で活発な意見が交換され、非常にポジティブな感想も多かった。世界レベルの研究者との直接的な意見交換により学びを深化させる機会を提供できたことは、将来を担う若手研究者にとって、今後の研究指針を手にする貴重な機会となったであろうと評する。

本特別招聘教授プロジェクトを通じて、当初の期待以上の成果がもたらされ、本学におけるジェンダー研究に、グローバルかつ学際的な最先端の知見を提供し、同時に、教育研究活動の活性化をもたらすことができた。

マリー・ピコーネ特別招聘教授

【招聘事業目的と期待される成果】

特別経費（国立大学機能強化分）によるジェンダー研究所実施事業の目的は、学術的かつ学際的なジェンダー研究を推進するとともに、日本及びアジアにおけるネットワークを構築し、男女共同参画社会の実現に資することにある。グローバル女性リーダー育成研究機構に設置されたジェンダー研究所は、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、高水準の研究プロジェクトの実施と、国際的な研究ネットワークの構築を推進する。特別招聘教授はこの両方に寄与する者であり、本学におけるジェンダー研究に、グローバルで学際的な最先端の知見を提供し、教育研究活動の活性化をもたらすことが期待される。

マリー・ピコーネ博士はオックスフォード大学において日本社会の死生観をテーマに博士号を取得して以来、米・英・仏・日の世界トップレベルの研究機関を拠点に一貫して日本研究に従事し、ジェンダー視点を重視しながら日本の宗教・民間医療・生物医学の相互作用過程に関する研究成果を発信し続け、世界的に高い評価を得ている著名な研究者である。最先端の学際的知見を有する同博士の採用により、本学ジェンダー研究の世界発信・世界展開の活性化とそれに連動した本学の教育研究活動のグローバルな活性化が十二分に期待される。

【マリー・ピコーネ博士プロフィール】



オックスフォード大学博士（人類学）。1990 年より仏・社会科学高等研究院准教授。米・プリンストン大学での教職、米・カリフォルニア大学バークレー校、国際日本文化研究センター、京都大学での客員研究員を経験。1980 年代から、日本におけるフィールドワーク調査を多数実施。医療人類学と宗教研究を融合し、特に、貧困、精神医学的实践、自殺等を含む社会問題をめぐって表出する死に対する態度の研究を進めている。近年の主な論文に‘Suicide and the Afterlife: Popular Religion and the Standardisation of “Culture” in Japan’（2012 年）、‘L’amour de la nature au Japon, mémoire culturelle ou stéréotype ?’（2014 年）など。

【採用期間】2015 年 10 月 1 日～11 月 30 日

【職務内容およびその支援】

ピコーネ博士に依頼した業務は、1) ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進、2) 国際シンポジウムでの基調報告およびその内容を論文として提出、3) 大学院生を対象とした IGS セミナーでの講義の 3 項目である。

採用期間中の業務支援については、同じく人類学を専門とする棚橋訓教授（基幹研究院／文教育学部／ジェンダー研究所・研究員）が研究面での協力者となり、セミナーおよび国際シンポジウムのコーディネーターとして企画運営に携わったほか、ジェンダー研究所スタッフが事務業務の支援および棚橋教授の補佐を担当した。

【プロジェクト概要】

1) 研究プロジェクト「*Mizuko Kuyô* in Japan from 1980 to the Present: A Comparative Perspective (1980 年代以降の日本における水子供養：比較研究の視点から)」の実施

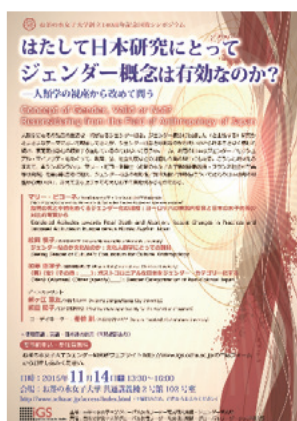
継続的に進めている、80～90 年代と現在の水子供養の比較および、現代における閻魔堂の地獄表象の研究プロジェクトの一環として、東京および近畿地方の寺社へのフィールドワークを実施。また、新しく、献体慰霊についての調査も開始し、篤志献体に関する普及啓発に関わる事業運営の中核を成す医師等へのインタビュー調査ならびに篤志献体事業を運営する公益財団等に関する資料調査を行った。



2) ジェンダー研究所主催国際シンポジウムにおける研究報告

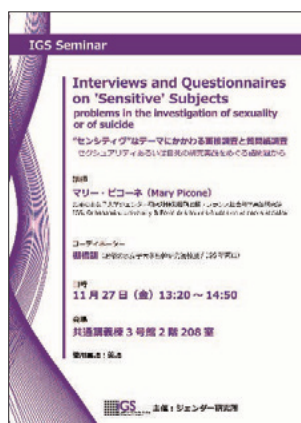
2015 年 11 月 14 日（土）開催の、お茶の水女子大学設立 140 周年記念国際シンポジウム「はたして日本研究にとってジェンダー概念は有効なのか？：人類学の視座から改めて問う（Concept of Gender, Valid or Not? Reconsidering from the Field of Anthropology of Japan）」（コーディネーター：棚橋訓 基幹研究院・教授／ジェンダー研究所・研究員）において、1) の研究成果を含めた研究発表「Gendered Attitudes towards Fetal Death and Abortion: Recent Changes in Practices and Imposed Attitudes in Europe versus *Mizuko Kuyô* in Japan (胎児の死と中絶をめぐるジェンダー化の諸相：ヨーロッパの実践的変容と日本の水子供養の対比的考察から)」を行った。本シンポジウムは、ピコネ博士の上記基調報告を中心に組織されたものであり、その成果は『IGS Project Series 2 はたして日本研究にとってジェンダー概念は有効なのか？：人類学の視座から改めて問う』として 2016 年 3 月に刊行された。

【参照：本報告書 56～58 ページ「国際シンポジウム「はたして日本研究にとってジェンダー概念は有効なのか？」」】



3) 大学院生対象 IGS セミナー講義

2015 年 11 月 27 日 (金) に「Interviews and Questionnaires on 'Sensitive' Subjects: Problems in the Investigation of Sexuality or of Suicide (“センシティブ”なテーマにかかわる面接調査と質問紙調査：セクシュアリティあるいは自死の研究実践をめぐる諸問題から)」(コーディネーター：棚橋訓)と題する大学院生対象の IGS セミナーを実施し、ピコーネ博士自身の研究テーマにおける課題を実例に挙げて、調査実践に関する講義を行った。



【プロジェクト成果】

本プロジェクトの各種事業を通じて、本学コミュニティのみならず、広くジェンダー研究・日本研究・人類学研究に携わる学外の研究者コミュニティに対しても、当初期待したとおりの十分な知的活性化を推進することができた。

国際シンポジウムに参集した学内外の多くの研究者がピコーネ博士との研究交流を通じて、当該分野の最先端の研究成果に関する知見を得ることができた。基調報告ではピコーネ博士の先端的な研究成果に基づく知見が披歴され、その共有を契機として、予定時間をはるかに超過するほどの極めて活発な質疑応答が繰り返された。また、学術研究におけるジェンダー概念の有用性と今後の可能性を再考するという、当該シンポジウムの挑戦的なテーマは、人類学に限らず多数の分野のジェンダー研究者の関心を集め、学際的な意見交換の場を作り出すという、ネットワークングの面でも大きな成果を残した。

38名の大学院生ならびに学部生が聴講した IGS セミナーでは、国際的に活躍する研究者本人からジェンダー研究や人類学研究が「臨床的な現場」において直面する諸問題に関する高度に実践的な内容の講義が行われ、さらに、それに続く質疑応答では学部生からの発言も含む極めて活発な意見交換がなされた。世界レベルの研究者との直接的な意見交換によって学びを深化させる機会が提供されたことは、将来を担う若手研究者にとって、今後の研究指針を手にする絶好の契機となったと評して良いであろう。

また、ピコーネ博士の研究プロジェクトの実施に際しては、本学博士後期課程大学院生1名と学部4年生1名が調査助手の任にあたったが、実際の調査研究とデータ分析の現場における世界レベルの研究者との協働の経験は極めて有意義な実践的教育効果を果たすものであった。

以上の諸点の成果が示すとおり、当初の期待のとおり、本特別招聘教授プロジェクトを通じて、本学におけるジェンダー研究に、グローバルかつ学際的な最先端の知見を提供し、同時に、教育研究活動の活性化をもたらすことができた。

アン・ウォルソール特別招聘教授

【招聘事業目的と期待される成果】

グローバル女性リーダー育成研究機構に設置されたジェンダー研究所は、日本におけるジェンダー研究の国際的研究拠点として、高水準の研究プロジェクトの実施と、国際的な研究ネットワークの構築を推進する。特別招聘教授はこの両方に寄与する者であり、本学におけるジェンダー研究に、グローバルで学際的な最先端の知見を提供し、教育研究活動の活性化をもたらすことが期待される。

アン・ウォルソール博士は、日本の近世末期から明治・近代国家成立における社会的変動とそこに生きる歴史的主体との関係を、ジェンダー秩序・編成の視点を組み込んだ、新たな歴史研究の視座を提示することにより、世界的に評価されている研究者である。とくに、明治期の女性史、大衆的記憶、農村企業家と家族イデオロギーなどの研究で著名である。グローバル時代の今日、本学において、ジェンダー視点を導入する日本・アジアの社会認識への新たな知見提供と、最先端の教育研究活動への貢献という期待を、十分に果たすことができると考えられる。

【アン・ウォルソール博士プロフィール】



シカゴ大学博士（日本史）。1991年からカリフォルニア大学アーバイン校歴史学部教授を務め、現在は名誉教授。専門は近世日本の社会史。最近は女性史およびジェンダー史を研究。代表的な著作は、*The Weak Body of a Useless Woman: Matsuo Taseko and the Meiji Restoration*, “Shipwreck! Akita’s Local Initiative, Japan’s National Debt, 1869-1872”, “Do Guns have Gender? Technology and Status in Early Modern Japan”, “Devoted Wives/Unruly Women: Invisible Presence in the History of Japanese Social Protest”。

【採用期間】 2015 年 11 月 14 日～2016 年 1 月 19 日

【プロジェクト概要】

- 1) 研究プロジェクト「Faith, Politics, and Affection: A Social History of the Hirata Atsutane Family（信仰、政治、愛情：平田篤胤一家の社会史）」の実施

平田神社から国立歴史民俗博物館に 2002 年に寄贈された大量の文献を基に、日本のナショナル・アイデンティティ言説への貢献で知られる平田篤胤一家の、個人的な関心事や家族の変遷、政治とのかかわりなどについて読み解く研究プロジェクト。代々木の平田神社で毎月開催されている「平田国学研究会」へ出席し、多くの一次資料を読み翻訳した。また、東京中央図書館で戊辰戦争の際の槍術戦に関する資料を調査した。この研究成果論文は 2018 年 3 月刊行の『ジェンダー研究』第 21 号に掲載予定。

2) 大学院セミナー等講義

2015年12月16日(水) 大学院セミナーおよび1月12日(火) 比較歴史学コースゼミにて、「いい兄貴ーわるい弟：Gender Dynamics in an Early Modern Family」と題し、1)の研究プロジェクト成果を基に、武家家族内の男性間格差についての講義を行った。



3) ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画

2016年1月18日(月) 開催の、国際シンポジウム「科学と工学を目指す女性へ (Women in Science and Engineering)」を、石井クンツ昌子ジェンダー研究所所長と共に企画。基調講演には、カリフォルニア大学アーバイン校のキャロル・セロン教授を招聘し、パネリストとして、本学の鷹野景子理学部化学科教授、加藤美砂子理学部生物学科教授に登壇を依頼した。

[参照: 本報告書 62～63 ページ「国際シンポジウム「科学と工学を目指す女性へ」」]



【プロジェクト成果】

国際シンポジウムおよび大学院セミナーを企画した石井クンツ昌子教授(基幹研究院人間科学系/ジェンダー研究所・所長)をはじめとするジェンダー研究所所属研究者や、在職期間中に開催された国際日本学コンソーシアムに参加した学内外の研究者がウォルソール博士との研究交流を持つことが出来た。教育面では、歴史学のセミナー講義に社会学系の院生が多く出席したことで、両分野の研究方法論について、学際的な意見交換がなされる場面も見られた。国際シンポジウムでは、基調講演で米国での理系女子学生に焦点を当てた最新の社会学的調査研究の報告がなされ、パネリストからは日本国内の理系女子学生・研究者についての調査報告がなされるなど、理系・社会学系双方からの関心が寄せられる、学際的かつ国際的で先進的な企画が実現された。また、国際シンポジウムのため来日したキャロル・セロン教授と本学院生や研究者とのディスカッション・セッションも別途企画され、国際的に活躍する研究者と直接に、各々の研究についての意見交換をする機会が提供された。